千葉医学専門学校・千葉医科大学時代の留学生たち

見城　悌治

はじめに

亥鼻キャンパスの医学部本館前に，一基の記念碑が建っている（写１）。多くの学生・教職員たちは，碑の存在をあまり意識せずその前を行き交うが，それはおよそ百年前の1912年に，千葉医学専門学校（当時）在籍の中国留学生たちが建てた辛亥革命をめぐる「感謝の碑」であり，近代日中関係史において非常に意味を持つモニュメントである。

写1.現在の記念碑

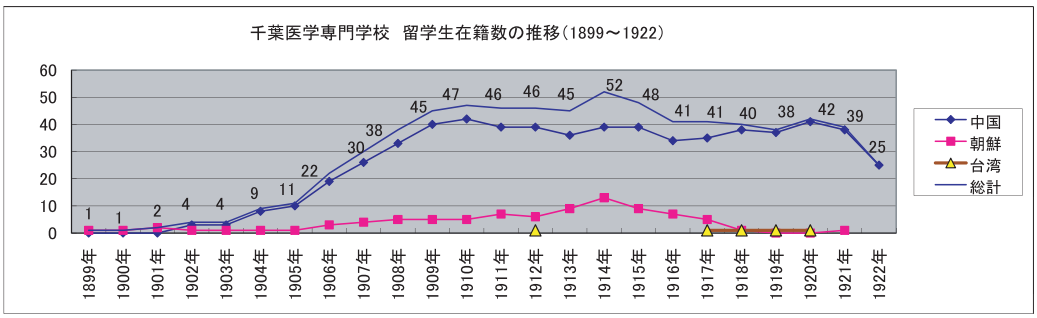
千葉大学医学部の前身にあたる千葉医学専門学校（1901～22年。以下，医専と略），また千葉医科大学（1923～49年。以下，医大）時代の本学は，少なくない数の留学生を受け入れていた。そして，その留学生たちのある者は辛亥革命への関わりを持ち，またある者は中華民国建国期の医学教育に貢献していくのだが，『医学部八十五年史』や『百周年記念誌』は，そうした史実についてはほとんど触れていない。

21世紀に入り，大学における研究・教育の国際化や海外との人的交流は一層加速化している。こうした折柄，千葉医専・医大時代の留学生をめぐる歴史を顧みることは，現在と未来に何らかの示唆を与えてくれるものと考え，以下，簡単に叙述するものである。

１　近代日本の留学生受入れと千葉医専

①千葉医専における留学生の受入れ

千葉大学医学部135年の歴史の中で，最初に受け入れた留学生は，1899年（第一高等学校医学部時



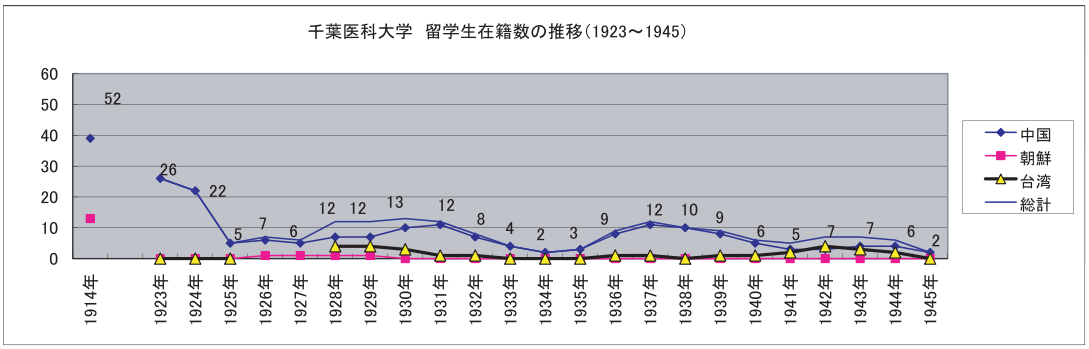


表1.千葉医専･医大における留学生在籍数の推移
出典：見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校･千葉医科大学における留学生の動向」「国際教育」第2号

代）の朝鮮学生（１名）であった。また，官立千葉医学専門学校へと組織変えされた1901年には，清国留学生をはじめて受け入れている。表１は，1899年から1945年までの千葉医専・医大が受け入れていた年次別留学生在籍者数を，中国・朝鮮・台湾の学生数および三者の総計に分けて，グラフ化したものである。これによれば，留学生の大多数は中国（清国・中華民国）学生たちで，日露戦争後の1906年から数が急増し，在籍数40名台の状況が十年余り続いた。しかし，1925年からは急減し，以後は10名あるいはそれ以下で推移したことがわかる。また，多数勢力であった中国留学生に限定した年次別入学者数をまとめたものが表２である。これを見ると，1906年から1921年までは（辛亥革命の影響を受けた1912年を除き），毎年10名を越える新入生が入学していたこと，1922年以後はきわめて少なくなったことが分かる。

この千葉医専・医大の留学生受け入れ数の変遷を，近代日本の留学生受け入れ史全体に照らして，位置づけ直しておこう。

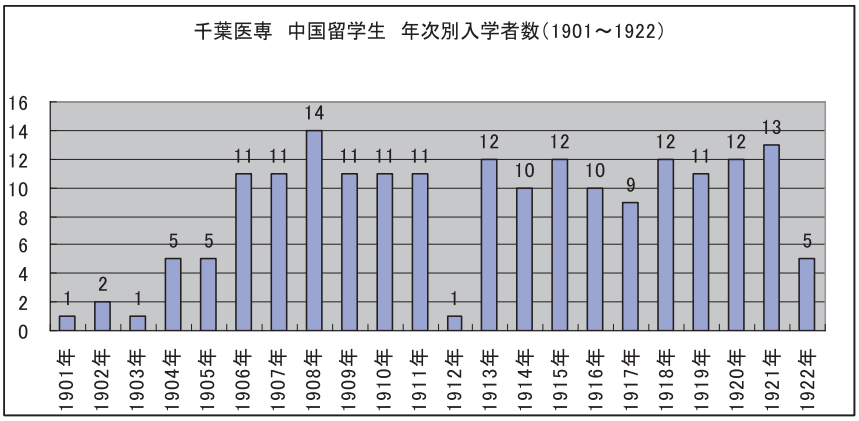
日本が受け入れた最初の留学生は，1880年代の朝鮮の若者であった。また中国については，日清戦争に敗れた清朝政府幹部が，「西欧化に成功した日本に学ぶ必要がある」と冷静に分析し，1896年に13名の留学生を派遣したのが，その始めであった。その後，中国留学生の数は年々増加していく。とりわけ，1905年に，中国で千年以上にわたり続けられてきた科挙制度が教育の近代化を進めるため廃止されたこと，同じ年に日本が大国ロシアとの戦争に勝利したことは，日本留学者を加速的に増やし，日露戦争後にはその数が，１万人を越えたと言われる。

日本にやってきた中国人留学生たちは，教育設備が充分とは言えない私立学校において，１年か１年半で課程を修了する「速成教育」を受ける人が大多数であった。そして，大学などの高等教育機関は収容人員が少なかったこともあり，本格的な学問や専門技術を学ぶことができた留学生はきわめて稀であったという。

②「五校特約」の時代

そこで，清国側は，1907年日本政府と協議し，留学生の出身省政府の経費負担によって，５つの官立学校へ入学できる特別枠を得た。すなわち，第一高等学校（現　東京大学教養学部）が65名，東京高等師範学校（のち東京教育大学，現　筑波大学）25名，東京高等工業学校（現　東京工業大学）40名，山口高等商業学校（現　山口大学経済学部）25名，そして，千葉医学専門学校（現　千葉大学医学部・薬学部）は10名，総計で165名の留学生を1908年から15年間受け入れることとしたのである。

この「五校特約」で選抜された留学生には，毎年



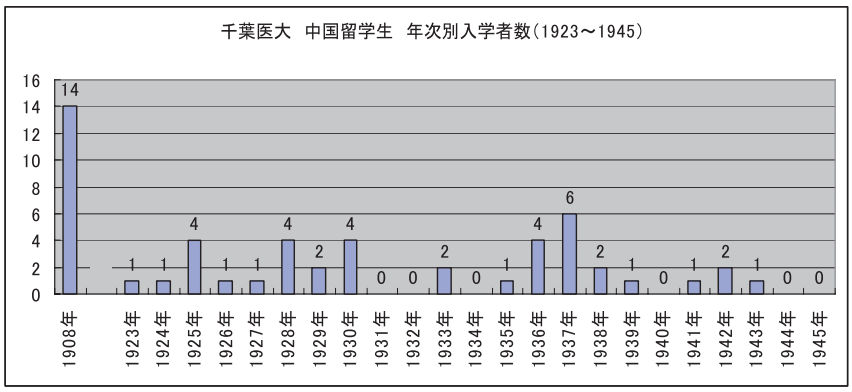


表2.千葉医専･医大における中国留学生年次別入学者数
出典:見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校･千葉医科大学における留学生の動向」「国際教育」第2号

学費と教育費（補助費）として１人650円が支給され，辛亥革命で清朝政府が倒れた後も継続されていった。

この制度は，千葉医専の留学生受入において，非常に大きな意味を持っていく。明治末期から大正期における千葉医専の医学科１学年の日本人在籍者数は，全体で100～110名程度，一方，薬学科は20名前後であったが，在籍生のそれぞれ一割程度（10名および２名程度）の留学生を「五校特約」時代においては受け入れていた。すなわち，表２で見たように，新入留学生が1908年以降，安定して10名前後であったのは，この制度に拠るものであり，また入学者が大幅に減っていくのは，それが廃止された1923年以降のことである。このカテゴリーの学生が卒業した1925年の在籍生は，たった４名となり，最盛期の１割程度となってしまう。

表３は，1899年から1945年までの間の千葉医専・医大に入学した留学生271名の国・地域別，学科別一覧である。中国（清国，中華民国）籍の学生が，83％（224名）の圧倒的多数を占め，朝鮮は30名で11％，台湾はさらに少ない16名（６％）の在籍に留まっていた。さらに，専門別では，医学専攻が198名（73％），薬学専攻が73名（27％）の割合であった。

ここまで，千葉医専・医大における留学生受け入れの変遷などを一瞥してきたが，千葉医専留学生受入れの特色を全国の官立学校との比較において確認しておこう（表４）。

1907年に文部省直轄学校に在籍していた中国留学生は368名おり，その中では東京高等工業学校（現，東京工業大学）が最大の73名を引き受けていた。また，医薬系では，千葉医専の18名が，他を大きく引き離し，１位だった。

その７年後の1914年に至ると総数は666名となり，1.8倍もの増加を見ている。医薬系では，千葉医専が38名と倍増。その他の医専では，長崎医専が１名から28名に，岡山医専が０から12名に大きく数字を増やしている点が注目される。

医薬系は教育・学問の性格上，他の教育分野に比べ収容能力に限りがある。そうした意味からも，千葉医専が全国でトップの40名前後の留学生を長年にわたり受け入れていたことは正しく認識・評価されるべきであろう。

中国留学生たちは，学問吸収を積極的に行ない，最先端の研究成果を共有するため，日本でたくさんの雑誌を発刊した。その中には，革命思想の理論雑誌『民報』などが含まれていたが，千葉医専の学生は，1907年１月に，『医薬学報』と題する雑誌を「中国医薬学会」の名の下で発刊している。さらに千葉医専薬学科の面々は，東京薬学専門学校，東京帝大薬学科等の留学生と1907年，「中華薬学会」を設立した。1917年４月には『中華薬学会雑誌』を発刊した。それぞれの雑誌は母国にも影響を与え，中国医薬学の発展に寄与したと伝えられる。

地域名	医薬別	入学者	卒業者	卒業率	中退者	中・卒不明
中国	医学	165	116	70%	46	3
	薬学	59	50	85%	9	0
	計	224	166	74%	55	3
「満州」	医学	0	0	0%	0	0
	薬学	1	0	0%	1	0
	計	1	0	0%	1	0
台湾	医学	6	2	33%	4	0
	薬学	10	7	70%	3	0
	計	16	9	56%	7	0
朝鮮	医学	27	19	70％	8	0
	薬学	3	1	33%	2	0
	計	30	20	66%	10	0
計	医学計	198	137	69%	58	3
	薬学計	73	58	79%	15	0
	総計	271	195	72%	73	3

表3.千葉医専･千葉医科大における在籍留学生数（1899～1945年）
出典：見城「戦前期留日医薬学生の帰国後の活動と現代中国における評価」『国際教育』第3号

学校類別		学生数	
		計	学校名（学生数；1907 年 → 1914 年）
帝国大学		45 → 101	東京（35→45）、京都（10→20）、東北（※→33）、九州（※→3）
官公立大学		19 → 0	札幌農科（19→0）
高等師範学校		46 → 82	東京（44→72）、広島（2→4）、東京女子（※→6）
官公立専門学校	高　校	55 → 134	一高（31→62）、二高（5→14）、三高（13→13）四高（0→5）、五高（3→11）、六高（0→11）、七高（6→10）、八高（0→8）、
	高等農業	9 → 10	盛岡（9→0）、鹿児島（※→10）
	高等工業	98 → 198	秋田鉱山（※→4）、東京（73→140）、京都工芸（2→9）、大阪（23→30）、名古屋（※→14）、熊本（※→1）
	高等商業	41 → 42	東京（41→27）、神戸（※→3）、山口（※→5）、長崎（※→7）
	医学系	19 → 79	千葉（18→38）、金沢（※→1）、岡山（※→12），長崎（1→28）
	その他	28 → 1	東京聾唖（1）
計		368 → 666	

表4.文部省直轄学校在籍中国留学生数の変遷（1907年→1914年）
（※印は1907年に創立されていなかったか，留学生受け入れがなかった学校）
出典：外務省記録文書「在本邦清国留学生関係雑纂 第一，第二」（二見剛史・佐藤尚子「中国日本留学史関係統計」「国立教育研究所紀要」第94集（アジアにおける教育交流）1978年，から作成。

2　辛亥革命と千葉医専留学生

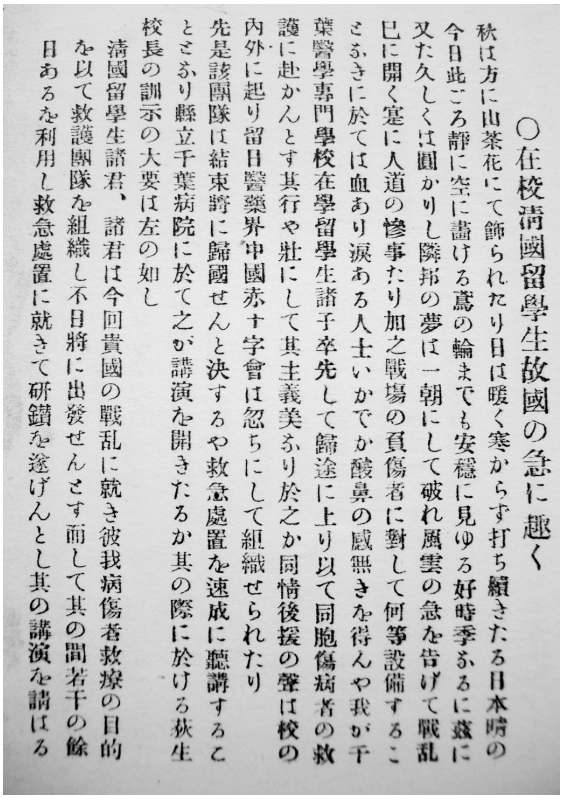
①紅十字隊の組織と千葉医専の支援

1911年10月，湖北省武昌での武装蜂起を発端とし，翌年１月には孫文を臨時大総統とする中華民国臨時政府が南京に樹立された。世に言う辛亥革命である。この革命が勃発した時，千葉医専には約40名の中国学生が在籍していた。彼らは「いずれも，志士揃いで，すでに前年から革命運動に参加していたものもあった。学生は会議を開き，硬軟二派に分れた時は，鉄拳の雨も降るという騒ぎであった」（鈴木要吾編『三輪徳寛』）という回顧が日本人学生によって残されているほど，みな革命への関心が高かった。実際に，千葉医専学生の方声洞と喩培倫は，同年４月の広州蜂起に参加し，落命している（彼らは，革命の先陣を切った「黄花崗72烈士」の中の２名として，今日でも讃えられている）。

革命勃発から２週間後の10月27日付『東京朝日新聞』に，「千葉医専留学生と革命」という記事が掲載されている。「千葉医学専門学校留学生は，清国の今回の動乱について，表面上は何気ない様子を装っているが，事実はそうでない。同校留学生39名中，モンゴル族の一人を除くほかは，ことごとく広東四川その他南清の出身であるため，今回の動乱については，革命軍に同情を寄せ，ひたすら勝利成功を祈りつつある有様である（略）しかしこれら学生は清朝政府から，医学校月謝および毎月33円を支給されている関係から，すこぶる慎重な姿勢を示している」云々。

千葉医専の中国留学生たちは，革命を支持する気持ちを持っていたが，打倒対象となる清国から「官費」をもらっていたことなどから，どのように対処すべきか，大いに苦慮していたようだ。

何度も議論を重ねた千葉医専の留学生たちは，最終的に，革命軍のみの支援でなく，清朝軍，革命軍を分け隔てなく救護する「紅十字隊（赤十字隊）」を組織し，祖国に赴くことを決定する（写２）。10月30日付『東京朝日』には，千葉医専の留学生が協定した条項── 赤十字精神に基づく行動をする事，横浜・神戸の華僑から義捐金を募る事，日本に留学する他の医薬生に対し，協力を求める事，戦闘が終結したら，ただちに日本に戻り，復学する事など──が示されていた。さらに，千葉医専教授の三輪徳寛


○在校清國留學生故國の急に趣く

秋は方に山茶花にて飾られたり日は暖く寒からず打ち續きたる日本晴の今日此ごろ靜に空に畫ける鳶の輪までも安穩に見ゆる好時季ふるに蓋に又た久しくは圓かりし隣邦の夢は一朝にして破れ風雲の急を告げて戰亂已に開く寔に人道の慘事たり加之戰場の負傷者に對して何等設備することふきに於ては血あり涙ある人士いかでか酸鼻の感無きを得んや我が千葉醫學專門學校在學留學生諸子卒先して歸途に上り以て同胞傷病者の救護に赴かんとす其行や壯にして其主義美ふり於之か同情後援の聲は校の内外に起り留日醫藥界中國赤十字會は忽ちにして組織せられたり

先是該團隊は結束將に歸國せんと決するや救急處置を速成に聽講するとふり縣立千葉病院に於て之が講演を開きたるか其の際に於ける荻生校長の訓示の大要は左の如し

清國留學生諸君、諸君は今回貴國の戰亂に就き彼我病傷者救療の目的を以て救護團隊を組織し不日將に出發せんとす而して其の間若干の餘日あるを利用し救急處置に就きて研鑽を遂げんとし其の講演を請はる

写2.『千葉医学専門学校 校友会雑誌』1911年12月号

から紹介された千葉医専OBの鈴木寿賀治を紅十字隊顧問医に委嘱することも決めた。

辛亥革命勃発時の千葉医専校長・荻生録造は，「戦争勃発に際し，なるべくその惨害を小ならしめるに努めるは，文明の精神を発揮する所以にして，その第一手段は傷病者に対する衛生設備を完全にすることにあり」（『東京朝日』11月５日付）という考えに基いて，三輪徳寛等ともに，留学生たちに応急医療技術の講習会を施すこととした。11月１日から８日の間に実施された講習会では，外科の専門家である三輪が「創傷療法」を担当したほか，筒井八百珠「外科手術」，井上善次郎「内科学」，荻生録造「眼科学」，平野一貫「調剤術」，森理記「包帯および担架術」，岩槻「看護法」等の講義が行われた。とりわけ三輪は講義の際，岳父の高松凌雲が戊辰戦争時に箱館で，官軍・幕軍を問わず医療活動をした精神を引き合いに出して，留学生たちを激励したと言う（鈴木要吾編『三輪徳寛』）。

このころ清朝政府の衛生顧問として中国に滞在していたある軍医の証言によれば，「清国の軍医の数は多いが，大半は漢方医で，ひどい場合は包帯の巻き方も止血の応急手当も知らず，膏薬のようなものを貼って一時をしのぐ有様であった」（『東京朝日』10月30日付）と言う。このように中国側の医療知識が十分でなかったとするならば，応急医療術などを学んだ千葉医専留学生が，実際の現場で力を発揮する場は多くあったと思われる。

講習会が終わった11月９日，中国に向けて出発する留学生たちのための壮行会が，千葉医専に在籍する日本人在校生および教職員たち650名によって，亥鼻キャンパスで開かれた。参加者は，薬品や衛生資材を購入するための資金として，一人50銭ずつの寄付を行ない，また壮行会が終わると，全員で千葉駅まで行進し，万歳の歓呼の中，留学生たちの見送りをしたと言う（『千葉医学専門学校校友会雑誌』1911年12月号）。

千葉医専留学生たちは東京に着いたのち，他学校の学生と「留日学生同盟中国紅十字隊」を組織し，出発の準備を整えていった。全国の医学校や研究機関に在籍していた中国医薬生からの参加希望は140名にも上ったとされるが，この大所帯をまとめる隊長に就いたのは千葉医専４年の陳任樑だった。また，副隊長に王曽憲（東京帝大３年），理事長には呉亜良（千葉４年）が選ばれた。幹事は４名おり，李定（千葉４年），李垣昌（同４年），丁求真（同３年），劉之綱（同２年）が，また書記には何煥奎（千葉３年），蕭登（千葉薬科３年）が就いた。（『国民新聞』11月18日付）。つまり，組織運営の中枢は，ほとんど千葉医専関係者が担う形になっていたのだが，それは，彼らが，全国の医薬生や華僑に支援を求めた当初の動きなどが，同胞たちからの高い信頼と評価を集めたためであろうと思われる。

さて，このように準備を重ねた留学生たちは，ついに11月18日，神田の旅館から「中国紅十字会」等の旗を翻しつつ（写３），医療器械・薬品等百余個の大小荷物を，馬車２台・荷車２台に載せ，新橋駅に向った。その途中にある三越呉服店では，留学生に茶菓の饗応や記念撮影まで行われたと伝えられる（『時事新報』11月19日付）。これなども，留学生たちが人道的支援のために母国に赴くことが，市民の関心や共感を呼んでいたことを窺うことのできる逸話であろう。

そして翌日には，千葉医専関係者を含む多くの見送りのなか，横浜港を発ち，一路上海に向ったのである。

②中国大陸での救援活動

11月26日に上海に到着した留日学生紅十字隊120名は，ただちに中国各地に派遣された。千葉・東京・名古屋・京都・岡山などの医専学生たちは，甲乙二隊に分けられ，陳任樑（千葉医専）を隊長とする甲隊は湖南省長沙に，孫家樹（京都府立医専）を隊長とする乙隊は江蘇省浦口と江西省九江に赴いた。

写3.『日本』1911年11月19日付

千葉医専の学生たちが，主として医療活動にあたった長沙市は湖南省の省都である（余談になるが，この長沙には，現在の千葉大学が積極的な交流活動をしている湖南大学があり，不思議な縁故を感ずるところである）。千葉医専学生の活動ぶりについては，当時長沙に在住していた日本人医師・全徳岩蔵の証言が残る（「長沙来柬」『同仁』1912年３月号）。

江西省の鉄道局に４年間勤めた全徳は，長沙日本人会の招聘で，1911年10月に長沙に赴任する。直後に勃発した辛亥革命の負傷者救護のため，全徳は湖南紅十字会から，助手50名に速成の医療講習を施すように依頼された。一方，長沙で病院を開いていた黄孟祥（1911年千葉医専卒）からは，彼の病院の手伝いも頼まれ，12月４日からそれに関わる。当初の１週間だけで，負傷兵100名，外来患者120～130名の治療に当ったと言うが，医師は黄孟祥と全徳の２名しかおらず，速成講習を終えた14～15名の助けを得ても，手が足りない状態であった。

しかし，そこに千葉医専学生たちが長沙入りし，状況は一挙に好転する。同年に卒業したばかりの黄孟祥にとって，旧知の学友が多い紅十字隊との連携は取りやすく，円滑な医療活動が進められた。その結果，全徳自身も間もなく自身の医院経営に専念することができるようになった，というのが彼の証言（日本に送った手紙）の趣旨である。

当時の長沙において，外国の医学校を卒業した中国人医師は黄孟祥しかいなかった。そして，革命に伴う負傷者救助で評価を高めた黄は，各方面から重用され，軍務医務科科長，衛戍病院院長，野戦病院組織作り，さらには医科大学計画員などを任されていったとされる。黄の事例からは，日本で医学を学び帰国した元留学生への期待がいかに大きかったかを窺い知ることができるのである。

留日学生による紅十字隊は，湖南省のほか湖北・江西・安徽・江蘇省などの地で，救護活動に当った。千葉医専留学生たちの精力的な活動は，革命軍幹部の耳にも届く。南京陸軍医院長一等軍医長に就いていた千葉医専の卒業生・王琨芳が，母校の荻生校長に宛てた手紙（1912年３月16日付）には，「荻生校長先生たちから，ていねいに御教示いただいたことを，陸軍部総長の黄興閣下にも伝言しましたところ，深く感謝しております」と記されていた（『千葉医学専門学校校友会雑誌』1912年４月号）。黄興は，孫文とともに辛亥革命を支えた人物であったが，彼からこのようなメッセージをもらったことは，留学生や千葉医専当局者にとって，この上ない慶びであったと思われる。

③留学生の復学と感謝の碑設立

革命の帰趨が落ち着きはじめた４月ころから，留学生たちは漸次キャンパスに戻りはじめ，ほとんどの学生は復学を果たした。そして，その半年あまり後，出発日からちょうど１年後の1912年11月９日に，亥鼻キャンパスの一角に，辛亥革命紅十字隊に対する支援の感謝碑を建設した（写真４）。

その全文は，以下の通りである。

辛亥秋中華民国革命事起武漢南北軍戦争甚烈同学恐戦禍蔓延而傷亡之数多也乃集同志起紅十字隊連合留日医薬学生全体返国以図拯救時本校校長及列先生深韙斯議凡関於救傷看護法悉心指導各学友復醵貲購薬為贈臨岐殷殷益資策励同人返国分駐於湘漢江淮間傷兵頗利頼之六閲月戦局告終蔵事返校雖無善可紀而列先生及諸学友盛意弗可泯也爰種樹立碑以為紀念其辞曰

王綱解紐　共和初建　国歩艱難　兵戎数見
伏屍塞川　碧血膏野　哀此生民　誰大護者

写4.記念碑落成式

壮三軍気　紅十字旗　生死肉骨　拯難扶危
維列先生　亦越諸友　作則大同　躋世仁寿
人道張皇　徳意滂沛　木石萬年　永垂勿替

現代日本語に翻訳すると，おおよそ次のような意味となる。

辛亥（1911年）秋，中華民国に革命が起こり，武漢での南北軍の戦争は，甚だ烈しくなってきた。留学生は，戦禍の蔓延にともなって，負傷したり死亡する者が多くなってきたので，同志を集めて赤十字隊を組織した。留日の医学薬学の学生を連合して，祖国に帰り，救援に赴いた。学校校長および諸先生方は，この挙を高く評価して，負傷の治療看護に関して，懇切に指導してくださった。また，学友は資金を醵出して，医薬品を購入し寄贈してくれ，出発に際しては資金計画を拡大して励ましてくれた。留学生一行は，祖国に帰り，湘・漢・江・淮の各地に分駐して，負傷兵の大きな頼りとなった。６ヶ月が経って，戦局は終りを告げたので，母校に帰ってきた。善事の記すべきものは何も無いが，諸先生および諸学友の行為を忘れないように，ここに樹を植え，碑を建てて記念とする。

その辞に曰わく，

王綱紐を解きてより（清朝宣統帝の退位），共和を初めて打ち建てたが，国の歩みは艱難で，戦争は絶えず，伏屍は川を塞ぎ，山野を血ぬらせている。この人民の悲しみは，誰が護るのであろうか。三軍を励ますのは赤十字の旗，生死肉骨の難を救い，危うきを助ける。諸先生方も学友たちも，極めて公平で平和な世の中を願っている。世の中に仁寿を致し，人道を広め，徳意が盛んになるよう，樹を植え，碑を建てて，万年永く讃える。

これが，百年近く経った今も，医学部本館前に立っている碑文の内容であるが，千葉医専の教員・学友たちの支援，現地に戻ってからの活動ぶりなどが，簡潔で含蓄ある文章として綴られている。千葉医専の歴史の中で，さらには日中交流史の中に特筆されるべき事項と言って良いだろう。

［**補注**：『千葉大学医学部百周年記念誌』（1978年）の冒頭口絵にも，この碑文全文が掲載されているが，その中に，十字余りの誤転記がある。上記引用で，下線を付した部分が，その誤字を訂正した箇所である。この修正は，鈴木昭治郎氏（千葉医大附属薬学専門部1950年３月卒業）からのご教示による。記して謝意を申し上げたい。］

さて，母校に復学した後の留学生たちの動向報告が外交史料館外交文書（1913年７月24日付）に残っている。そこにいわく，「千葉医専学生の復学後の行動を内査した結果，同校卒業生で，現在南軍（革命派）の軍医部長に就いている王若巌から，在校幹事の何煥奎に宛てた手紙が届き，『個人として，この際帰国すべき』と書いてあった。そのため，在学生は協議し，夏季休暇中に，何煥奎を代表として視察に向わせた。千葉医専の中国留学生は32名いるが，30名は孫文に近い南軍派で，権力を掌握している袁世凱側にあたる北軍派はわずか２名にすぎない。もし，視察してきた何が，帰国を促すならば，全員が帰国する可能性もある」云々。

これは，内務官僚であった千葉県知事が内務大臣に送った秘密報告である。日本の関係者たちは留学生たちが急いで帰国することを心配していたようだが，実際には，中途退学をせず，知識や技術を修得し，卒業した上で，母国に戻った学生がほとんどだった（たとえば，何煥奎は卒業後，江西省立医学専門学校の教官となる）。そして，中華民国という新しい国家の建設に，それぞれ貢献していくのだが，その事情を次に述べていこう。

３　中華民国における医学教育と千葉医専・医科大卒業生の役割

①医薬系の帰国留学生における千葉医専・医科大の占める位置

明治末から昭和初期に，日本で学んだ医薬系中国留学生の中で，千葉医専・医大出身者が最も多かったことを示すデータが二つある。一つは，同仁会（日本の医学界が，中国医学界との連携・協力支援を目指し，1902年に設立した団体。日中戦争時には戦争協力をしたと見なされ，戦後は解散させられた）が1930年夏にまとめたデータで，これによれば，800名弱の元日本留学生のうち，千葉医専・医大の卒業者が154名で他を引き離した第１位になっている（全体の20％）。東京帝大医学部出身者は第３位の90名に留まり，魯迅が一時在籍していた東北帝大医学部に至っては，20名程度の卒業生しかいなかった（表５）。

また，外務省が中国各地の日本領事等に作成を命じた「留学生帰国後の状況調査（1934年）」でも同様な傾向が示されている（外務省外交文書）。この

学校名	卒業者数	比率	学校名	卒業者数	比率
千葉医大	154	20%	東北大医学部	20	2%
長崎医大	102	13%	京都府医大	18	2%
東大医学部	90	11%	東京薬専	15	2%
東京医専	62	8%	帝国女子医専	13	2%
東京女子医専	62	8%	金沢医大	10	1%
九大医学部	37	5%	京大医学部	9	1%
愛知医大	37	5%	慶大医学部	7	1%
岡山医大	28	3%	熊本医大	7	1%
日本医大	27	3%	富山薬専	5	1%
大阪医大	24	3%	その他	41	5%
東京慈恵医大	21	3%	総計	789	

表5.留日中国医学生の出身校(1929年頃まで)出典:『同仁医学』1930年９月号

調査の医学系元留学生総数は421名とされており，出身校別では，千葉医大が86名で第１位（全体の20％）だった。以下，長崎医大65名，東京医専38名，九州医大32名，東京女医専27名と続いている。

薬学系でも，判明している帰国留学生65名のうち，千葉医大薬学科が27名。以下，東京薬専11名，長崎医大薬学科９名，東大医薬８名，富山薬専４名などで，千葉の薬学出身者が全体の４割を占めていた。

これら二つのデータから，帰国留学生中に占める千葉医専・医科大卒業生の割合がきわめて高かったことがわかるのである。

ところで，彼らは帰国後，どのような職業に就いたのだろうか。諸史料から判明した分を便宜的に七つに分けて，数値を示してみよう。まず総数は213である（このデータは，複数の仕事を遍歴した人をそれぞれ一つと数える「延べ数」としている。また中国留学生だけでなく，朝鮮・台湾の卒業生も含んでいる）。最も多かったのは，医学校教官で67名（32％），開業医が45名（21％）。次いで，勤務医41名（19％），軍医37名（17％），会社・工場勤務10名，政府・官庁勤務10名，諸学校勤務３名の順であった。詳細に見ると，朝鮮・台湾出身者で，医学校教官および軍医になった人はおらず，また朝鮮出身者の勤務医が９名，開業医が８名いるため，この数を減じ（総計を196名とし），中国卒業生間における百分比として改めて算出すると，医学校教官の比率が34％，開業医が19％，軍医が19％，勤務医が16％になる。つまり，中国へ帰国した留学生に限定すると，母国の医学校教官として，若い学生たちの教育に当った人が最も多かった。

帰国留学生たちの職業的特色を明確にするため，第一高等中学校医学部時代から千葉医科大学までを通じた日本人卒業生3273名（1925年まで）の職業と対比してみよう。すると，日本人卒業生の65％（2099名）は開業医，次いで17％（570名）が勤務医であった。両者を合わせると80％となり，同校が日本各地で地域医療に従事する医師を着実に養成していたことが伺える（『千葉医科大学一覧』1925年版）。一方，中国留学生たちが医学校教員や軍医に就く比率が高かったのは，新しい国づくりに貢献した人たちが多かったことを物語っていると思われる。

②千葉医専・医科大卒業生が関わった中国のおもな医学校

(A)　浙江省立医学専門学校

漢方医（中医）が大きな影響力を持っていた中国では，西洋医学を教育する学校が創設されてくるのは，辛亥革命以降であったと言う。その先駆の一つが，1912年６月，浙江省の公費によって日本留学組が設立した浙江省立医学専門学校（杭州市）である。同校には，千葉医専紅十字隊のメンバーであった李定・余継敏・丁求真・朱其輝などが，教官を経て，それぞれ校長に就くなど，千葉医専と強い繋がりを持っていた。

1935年３月に，杭州在の外交官が日本に送った外交文書には，同校は「千葉医大出身王佶が校長に就任し，日本留学生出身者が圧倒的大多数を占めるようになった」と記載されているが，実際この時に浙江医学専門学校の医科専門教官18名のうち，過半数を越える10名が千葉医専・医大卒業生だった。さらにまた薬科の専門教官８名中，２名が千葉OBであった。驚くべき比率と言える。

(B)　北京医学専門学校および北京（北平）大学医学院

北京医学専門学校も，1912年に創立された医学校である。初代校長には，浙江医学専門学校の設立に尽力した湯爾和（金沢医専卒）が就き，千葉医専卒業生も多く，勤務していた。たとえば，辛亥革命前に卒業帰国した方擎は，同校教授となっている。1914年に卒業した朱其輝は，ドイツのベルリン医科大学でも学んだのち，浙江省立医薬専

門学校長を経て，1936年，北平大学医学院内科学教授兼付属医院長に就いた。呉祥鳳（元紅十字隊）は1915年に卒業した後，ドイツとアメリカ（ジョンポスキンス大学）へ留学を重ね，帰国。北平大学医学院内科主任教授を経て，1933年同医学院院長となり，北京大学教務長も務めている。

1936年８月に，北平大学医学院を訪問した東京帝大医学部長・永井潜の視察談によれば，訪問時の正教授21名のうち10名が元日本留学生（千葉と九州出身者が各４名，岡山と京都が各１名）であったとされる（『同仁』1936年10月号）。ここでも，千葉医専・医大OBが活躍していた。

(C)　江蘇公立医学専門学校および上海東南医学院（東南医科大学）

1912年，蘇州に設立された江蘇公立医学専門学校でも，４，５名の千葉医専出身者が教授を務めていたが，同校は1924年に閉校されてしまう。それを惜しんだ千葉OBの郭琦元，李祖蔚，湯紀湖，葉曙らが，1926年５月，同校を上海の地で再建し，私立上海東南医学院（のち医科大学）とした（初代校長は郭琦元）。

新中国が成立すると，この上海東南医科大は，地方医療へ貢献するため，安徽省合肥市へ移転され，1952年安徽医科大学として再出発する。その安徽医科大学から，最近千葉大学にもたらされた資料によれば，上海東南医科大に関わった教員（元日本留学生）58名のうち，千葉医専・医大出身者が28名と過半数を占めていること，また東南医大草創期に，当時の千葉医大から医療器具やベットなどが寄贈されていることが明らかになった。これも戦前において，千葉医大が中国の医学発展に貢献していた事例の一つである。

(D)　江蘇省南通医学専門学校および南通医科大学

江蘇省南通市は，清末から民国初期に活躍した民間企業家・政治家である張謇が，日本をモデルとし，近代的教育や社会公益事業を展開した上海近郊の地方都市である（見城他編『近代東アジアの経済倫理とその実践』）。張謇は自らの構想の一環として，南通医学専門学校を設立したが，その学校の責任者に据えられたのは，千葉医専出身（1911年卒業）の熊輔龍だった。熊をはじめとし，同校教官はほとんどが日本留学組で，その後６，７名の千葉医専OBが教授に就いている。また南通市内の医院にも４，５名の卒業生が勤めていたことが明らかになっている。

以上，卒業生が多く勤めていた４つの医学校を紹介してきた。筆者の調査では，直隷省立医学専門学校，河北省立医学院，山東大学，江西省立医学専門学校，四川省立医学専門学校，広西省立医学専門学校，貴州大学などにも千葉OBがいたことが分かっている。

辛亥革命期や民国建国期は，軍医学校も重要な位置を占めていた。千葉で学んだOBたちは，北洋軍医学校，天津市陸軍軍医学校，北京陸軍軍医学校，北京陸軍衛生材料廠，南京陸軍医院，杭州中央航空学校，湖北第一陸軍医院軍医，山西省綏靖署軍医処第二科長，陝西省防疫処研究科主任，湖南省長沙府軍医課長，広東陸軍総医院軍医，貴州陸軍病院院長，広州第一衛戍病院医務長，広西軍医薬局主任などに就いている。

さらに，OBが就職した政府行政機関も併せて紹介しておけば，北京内務部，北京天檀中央防疫処科長，天津市衛生局科長，杭州市政府衛生局長，国民政府衛生部科長，福建省政府参議などがあった。変ったところでは，国際連盟中国秘書を歴任した人もいる。

つまり，千葉医専・医大で学んだ留学生たちは，中国大陸のあちらこちらで，近代医学の発展普及のために，様々な形での貢献をしていったのである。

実際の教育や医療実践だけでなく，日本の医学書を翻訳し，母国に紹介する作業にも千葉医専・医大卒業生は当たっている。日本の医学関係者が中国との連携あるいは影響力行使のため設立した団体に同仁会があったことは，先に触れた。この同仁会は1927年から「華文医薬学書刊行会」を立ち上げ，1942年までに31種類の翻訳書を発刊したが，そこに千葉OBも関わっている。蹇先器（1920年卒，北京大教授）は小澤修造著『内科学』全４巻を翻訳している（第１巻は，呉祥鳳ほかとの共訳）。蹇は，『皮膚及性病学』，『泌尿科学』の翻訳も行なった。茂木蔵之助著『外科学』全３巻の訳者には，李祖蔚（1923年卒，上海東南医大，広西省立医学院教授），孫遵行（1922年卒，浙江医学専門学校，北平大学教授）が加わっていた。また一方で，千葉医科大教授の長尾美知ほか共著の『小児科対症療法』，筒井八百珠ほか共著『臨牀医典』も，他大学出身の元留学生の手によって翻訳出版されていた。

同仁会はのちに日本の中国侵略の先棒をかついだ軍の協力団体と見なされ，批判されていく側面があったが，元日本留学生を通じた相互協力関係の構築には功もあった。とりわけ，医薬書の翻訳活動は，学術性・実用性ともに高く，中国人のニーズにも十分応え，売れ行きが好調であったという。

おわりに

1928年７月，「中華民国学生留日千葉医大同窓会」の幹事である張效宗（卒業後，上海東南医大教員）が，在日中華民国留学生監督に対し，「千葉医科大学に昇格した1923年以来，我国留学生は資格関係のため同校に入学するもの年々減少する有様である。しかし留日千葉医薬同窓会は，我が中華民国建設の初期に当り，国民の保護，社会衛生の設備は医学人才に待つところは最も大きいと考え，学校当局に留学生のための予科を設けるよう依頼した。大学当局も本校が留学生と特殊の歴史をもっているため，欣然として許諾してくれた。しかし，経費負担は文部省の承認を得ないといけないので，監督処を通じて予科ができるよう働きかけて欲しい」と訴えている史料が残っている（外交史料館所蔵史料）。

ここで張は，千葉医専が「大学」に昇格して以降の現状を嘆きながらも，卒業生が中華民国「国民の保護，社会衛生の設備」に努めてきたことを強調している。千葉医大の側も留学生との「特殊の歴史」を鑑み，予科設置を諾としたとされている。

その３年後（1931年）には，千葉医大２年次在籍生の王烈が，『日華学報』（1931年４月号）に千葉医大の紹介を行なっている。いわく「千葉医大は相当に古い歴史を持って居ります。（略）本学における諸先生方は，吾々留学生に対して，相変わらず非常な熱情と親切を尽され，同級生もよく了解して，互いに心持よく勉学の方面にも交遊の方面にも，国籍を超えて和気藹々としていますから，吾々の本学における学生生活は非常に愉快なものであります。（略）当地は一般の人が倹朴醇厚，風習も良好なので，学校における師友以外の人々もまた親切にしてくれるのは，心から嬉しく思います」云々。

王烈（卒業後，彼も上海東南医大教員）は，『日華学報』の購読者である中国人受験生に対し，千葉医大の充実ぶり，千葉市民の親切さを強くアピールしようとしていた。このように在籍中国学生たちの千葉医大への想いは熱かったが，「留学生予科」の設置は，文部省当局から最終的に認められず，留学生数が増加することもなかったのである。

しかしながら，それ以前の「特殊の歴史」，すなわち1908～22年の千葉医専時代は，日本留学を目指す医薬系官費留学生の「特約校」となり，多くの中国留学生が在籍していた。彼らには「非常な熱情と親切を尽」くす教育が展開されただけでなく，学内で様々な便宜と配慮が図られていた。たとえば教授の退職記念会，また教授急逝にともなう葬儀・追悼会など，学校が主催する公的な行事において，留学生たちは必ず「謝辞」や「弔辞」を読み上げる役割が与えられた。つまりは，学校の重要な成員であることを内外に知らしめる機会が確実に用意されていたのである。とりわけ，1911年の辛亥革命勃発時の赤十字隊への支援は，千葉医専関係者の「熱情と親切」が最大限発揮された場面であった。

戦前期日本の医薬系大学を卒業した留学生の中で，千葉医専・医大出身者が最も多かったことも改めて強調しておきたい。1937年７月の日中戦争勃発が，帰国留学生を難しい立場に追い込んでいった側面は看過できないが，総体として千葉医専・医大を巣立っていった中国留学生たちが，中華民国成立後に創設された近代的な医学校の教員に就き，中国の医学の発展に果たした役割は非常に大きいものがあったのである。

留学生たちが体験した様々な歴史を知ることは，千葉大学医学部が二一世紀において国際交流・協力を展開し，発展していくために多くの示唆を与えてくれるであろう。

【付記】本稿は，見城「明治～昭和期の千葉医学専門学校・千葉医科大学における留学生の動向」『国際教育』第２号，2009年３月，および見城『近代の千葉と中国留学生たち』（千葉学ブックレット）千葉日報社，2009年12月をもとにして，再構成したものである。前者には，千葉医専・医大に入学した留学生266名の名簿（名前・入卒年・出身地・卒業後の仕事など）を掲載している。

なお，上記の２著作を発表後，新史料の発見などで，留学生数等に一部補足，訂正が生じた（たとえば，留学生総数が271名になるなど）。本稿では修正後の新データに基づいて執筆しているが，訂正内容の詳細については，見城「戦前期　留日医薬留学生の帰国後の活動と現代中国における評価」『国際教育』第３号，2010年３月を参照されたい。

（けんじょう　ていじ）